

## 序文

2011年3月11日(金曜日)14時46分に日本の東北地方で発生した日本観測史上最大のマグニチュード9の大地震、それに伴う津波襲来、原子力発電所の放射性物質の漏洩が引き起こした「三位一体の受難」<sup>1</sup>(地震・津波・原発事故)、複合型災害のため、日本は戦後未曾有の災難・災害に見舞われることになった。緊急状態中、日本政府は早速2011年4月1日の閣議でこの災害の名を「東日本大震災」とし、それ以降、メディアもそれに倣い、一本化した。それで、「東日本大震災」の名称が世に誕生し、「3・11」と通称されるようになった。その後、「福島」は原爆投下地のヒロシマ、ナガサキと同じように、平仮名で表記されることなく、片仮名の「フクシマ」と表記されることにより、烙印された深刻な事態を歴史と共に歩む特殊な運命を担うようになった。

それを契機に、一大惨事の3・11により日本文学がいったいどのように移り変わっていくかに興味を抱くようになり、「原爆文学」とは違う、一つの系列の「原発文学」を課題にすることに決めた。その研究成果は『日本原発文学の探求—文学の力を信じて』(2018.9、瑞蘭国際)に纏め、先に世に送り出すことができた。

その一方で、日本の原発文学を研究し続けているなか、近年大い

---

<sup>1</sup>マニュエル・ヤン(2012.2)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての3・11』河出書房新社P93では、「3・11における三位一体の受難(地震/津波/原発事故)は死の覚悟をわたしたちに植え付けた」とある。

に進んできている人間を取り巻く大自然との対話研究を重視し、発展してきた「ネイチャーライティング」(nature-writing、環境文学)と、「エコクリティシズム」に出会い、それぞれの理論が示唆的で、大変啓発された。そこで、「ネイチャーライティング」、「エコクリティシズム」の理論を指針に日本文学作品を検証するという新しい課題を見出すことができた。その成果をまとめたのが本書である。

本書の題名は、『自然、生態批評による日本文学の論究—ポスト3・11のグローバル社会に向けて』とした。本書は、主に「ネイチャーライティング」を指針に考察を進めてきた第1部と、主に「エコクリティシズム」を指針に考察を進めてきた第2部の2部で構成されている。以下、各部の章立てについて簡単に説明する。

第1部の第1章では、「ネイチャーライティング」の定義・起源・系譜・特徴を述べることにし、ネイチャーライティングとしての日本文学を検証する際、「場所の感覚」、「環境問題文学との関連」、「交感と表象」といった3つの特徴を重要な観点として把握した。と同時に、後に続く各章では、この3つの観点を作品を検証する指標に使うことにした。第1部の第2章では、3・11が発生した2011年に発表された日本の原発文学作品、川上弘美「神様 2011」(2011.6)、古川日出男「馬たちよ」(2011.7)、津島佑子「ヒグマの静かな海」(2011.12)の3作品を研究対象にする。この3作品は、いずれも人間中心主義的視点に偏ることなく、日本で生きている動物(くま、馬、ヒグマ)の視座から原発の課題を描いている点で共通しているからである。本章での考察を通して、「ネイチャーライティング」として

のポスト3・11の日本原発文学に、動物たちが呈示した現代文明の黙示録、そして同時代作家の持つ共時的ビジョンを解明し、ポスト3・11においてこそ活かされる環境文学の意味を追究する。第1部の第3、4、5章では、戦後の日本で公害の告発文学、文明批判者、反近代思想家として高く評価された石牟礼道子の代表作『苦海浄土』を取り扱うことにする。長い歳月を掛けて完成した『苦海浄土』は、戦後の日本社会が技術・文明との葛藤の苦難を重ねた歴史的記録とも言えよう。石牟礼道子は、一主婦として水俣病に侵された故郷の水俣市(九州熊本県)の漁村の現状に目を向け、1969年に『苦海浄土—わが水俣病』(以下『第1部』と略す)を発表し、以後『苦海浄土・第2部「神々の村」』(2004、以下『第2部』と略す)、第3部『天の魚』(1974)を加えて、一作品として完成した。現在、完成した作品として『石牟礼道子全集』第2巻、第3巻に掲載された『苦海浄土』を纏めて読むことができる。第3章では『苦海浄土』の第1部、第4章では『苦海浄土』の第2部、第5章では『苦海浄土』の第3部という順番に、「ネイチャーライティング」の分野で重要視される「場所の感覚」、特に人間がこの世に生を享けて最初に触れた場所としての「故郷」への「場所の感覚」に基づき、「空間」(space)、「場所」(place)、「居場所」(whereabouts)の三つのトポロジー(topology)に分け、故郷との対話に焦点を当てて、逐次的に考察を進めることにする。

続いて、第2部の第1章では、環境問題への危機意識に基づき、1990年代以後から発展した文学・文化の批評理論であり、方法論の

一つである「エコクリティシズム」の由来・定義・援用について述べることにし、エコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」と言った、環境中心主義の2つの観点を把握した。と同時に、後に続く各章では、この2つの観点を作品を検証する指標に使うことにした。第2部の第2章では、3・11の啓発による自然との調和を目指して、日本の伝統的食文化一希有品種「うなぎ」を食べることを、歴史的文献、民俗風習、諺、火野葦平の小説『赤道祭』(1951)、和田はつ子の小説『旅うなぎ』(2009)の文学作品、映画『うなぎ』(監督今村昌平、1997、松竹)、村上春樹の「うなぎ説」(2003)から総体的に考察する。そして、第2部の第3章では、ポスト3・11に放射性物質を題材にして創作され、脚光を浴びるようになった多和田葉子の代表作「不死の島」(『それでも三月は、また』収録2012.2.24、鈴木哲発行、講談社)、「猷灯使」(『群像』2014.8掲載、単行本2014.10講談社)を研究対象にした。そして、エコクリティシズムから「不死の島」と「猷灯使」との連続性あるいは断絶性を分析し、原発テーマに関心を寄せ、根気強く書き続けている作家多和田葉子の書くことの「倫理」の究明を本章の目的とする。具体的にエコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」のような、環境中心主義の観点から、「不死の島」と「猷灯使」を分析、比較対照し、原発をめぐる作家多和田葉子の文学的関心と実践の軌跡を辿ることとする。第2部第4章では、エコクリテ

ィシズムの観点で多和田葉子の「猷灯使」、「韋駄天どこまでも」、「不死の島」、「彼岸」、「動物のバベル」の5作品を収録した『猷灯使』に描かれた震災の状況を分析し、震災をテーマに根気強く追求し続けている作者多和田葉子の意図を究明する。さらに、第2部第5章では、3・11以前に遡り、1974年10月14日から翌年1975年6月30日の8ヶ月半にわたって『朝日新聞』朝刊に連載され、1975年4月に上巻、7月に下巻が、新潮社から単行本として刊行された『複合汚染』を研究対象にした。作者有吉佐和子は「告発」でもなければ「警告」でもありません。一人でも多くの人が、もう少し現実について知るべきだ<sup>2</sup>とし、「分かりやすく面白く書くこと」<sup>3</sup>を小説作法のモットーに、掲載を自ら進んで朝日新聞社の学芸部に頼んだと説明している。「構成の破綻」<sup>4</sup>、「型破りの小説」<sup>5</sup>と批判された『複合汚染』が書かれた時代の日本は、高度経済成長のマイナス面として「第二期目にはいった公害」<sup>6</sup>が本格的に取り上げられ、1970年の「公害国会」以来、産業公害と都市公害の深刻化に対する激しい住民運動の結果、環境規制法制が施行されるようになった時期で

<sup>2</sup>有吉佐和子(1975)「あとがき」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』新潮社P610

<sup>3</sup>前掲有吉佐和子「あとがき」P610

<sup>4</sup>関川夏央(2006)『女流 林芙美子と有吉佐和子』集英社P208

<sup>5</sup>奥野健男(1975)「解説」有吉佐和子(2014・初1979)『複合汚染』潮社P615、田村真八郎(2006)「有吉佐和子著『複合汚染』再読 農業はすべていけないか、などとは言っていない」『食の科学』6月号日本評論社P46

<sup>6</sup>宮本憲一・有吉佐和子(1975)「対談 人間を複合汚染から救えるか」『潮』潮出版社195号P265では、宮本が「いま公害は第二期にはいり、第一期のように単一の企業やコンビナートが急性の災害を出すという現象ではなく、種々の汚染源が慢性的に微量の汚染物を出し、それが複合して広い範囲に影響を及ぼすという現象が多くなってきました」と指摘している。

もある<sup>7</sup>。また、作品中頻繁にレイチェル・カーソン<sup>8</sup>の『沈黙の春』(原文は Silent Spring で、1962 年の出版、1964 年に和訳『生と死の妙薬』が出され、1987 年に『沈黙の春』に改めた。)、石牟礼道子の『苦海浄土』<sup>9</sup>(1969-2004)に言及したこと、さらに作品中で「公害について、私がそれを主題とした小説を書こうとして準備に入っただのは十三年前のことであった」(P99)と明確に示していることから、有吉佐和子が公害問題の提起を主眼にしたことは明白である。本章では、第 2 部第 1 章で纏めたエコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」と言った環境中心主義(自然)の観点から、自然との対話に焦点を当てて、「純文学の極致」とまで言われた『複合汚染』の考察を進めていくことにする。

以上の 2 部 10 章により、自然破壊が思った以上のスピードで世界各地で被害を加速している 21 世紀の今日、より多くの人々に「ネイチャーライティング」、「エコクリティシズム」の視点の文学創作への援用事例を広く知らせ、厳粛に直視してもらうため、ポスト 3・11 をグローバル社会へ新しい文学の機能として発信するという信念に基づき、本書『自然、生態批評による日本文学の論究—ポスト 3・11 のグローバル社会に向けて』を纏めた次第である。前作『日

<sup>7</sup>寺田良一(2016)『環境リスク社会の到来と環境運動』晃洋書房 P3

<sup>8</sup>星寛治(2004)「わが内なる有吉佐和子—複合汚染—から三〇年に想う—」『土と健康』32(7)有機農業研究会 P3 では、有吉佐和子を日本のレイチェル・カーソンと見ている。

<sup>9</sup>それに関する詳論については、第 1 部第 3 章、第 4 章、第 5 章を参照されたい。

本原発文学の探求—文学の力を信じて』と合わせ、現代文明が潜在的に拡大させている自己破壊的エネルギーとしての原子力、エネルギー問題が暴走する危険性と、現代文明を存立させるために不可避免的に進行していく環境破壊の暴力性に、文学を通じて一人でも多くの人に自身の生存の問題として、向き合っていたきたいと心から願うものである。